

● 黒田清輝畫伯の談片(下)

倍、裸躰畫にも一絲も懸げざる赤條々たるものもあるし、又腰部の邊に帛を纏ツたものもあります、コレは敢て六ツかしい理窟のある義わけでもなンでもなく、唯、畫面の都合でヤル迄の事で簾だてゝいふほどの事ではないのです、前にも申した通り、裸躰畫は或る高尚な理想を畫にしたもので、裸体畫そのものは普通の肉躰ではない、全く「人間」以上のもので、ところがドーも今のヨーに裸躰畫に對してヤレ乳の工合がドーだとか、腰の容子がコーだとか一局部に就いてのみ觀るとオイ／＼氣になるヨーなことになつて來る、ソレだから裸体畫に對する時は先づ此畫は何等の目的によつて描かれたものであるかといふ点を考へて貰ひたい、ソーすれば菽麥も辨ぜざる白痴者ならばイザ知らず苟も常識あるものは、其描かれてある人物が裸体であローとも高尚なる目的によつて成立ツたものであるといふことを會得した限り、決して卑猥な所謂肉感を挑發するのなシのといふ筈は萬あるまいと信ずるので、否崇高なる感に打たれねばならぬ筈なのです、シカシ我々の描く裸躰畫はマダ其處までに行つて居ませんヨ、唯研究の結果描くといふまで、元來畫を學ぶに人躰を手本にして研究するより優ツた方法は斷じてない、恐らく世の中に人間の身躰ほど變化に富んだものはないでせう、例へば爪のヨーな硬いところもあり、又腹のヨーにブワ／＼した軟かいところもある、ソーかと思ふと脈のヨーな一種の堅サをもツたところもある、顔にしても其通りで耳目口鼻はもとより額、頬、頤など凹んだ處もあれば凸ツた處もあるといふ風に、皆ソレ／＼特種な性質を有ツ

て居る實に神變不思議なものです、のみならず第一人間は日常目に觸れて居るものですから手本とするには極めて便宜です、であるからコレに依つて研究するは書を習ふものに取つて最も必要なことであらうと考へます、コレまでは徳利見たヨーな人を描いても、日本人は見なれて居るから敢て怪まないが、到底ソレは萬國に通用するものぢやないです、予の描く裸躰畫の人種ですが、今いふ通りの義わけで可成なるべく的日本人を描コーといふ方針ですが、畫面の都合で西洋人でなければ治らぬ場合には西洋人を描きます、現に今或る人から頼まれて描いて居るのは西洋婦人を摸型モデルにしたので、コレは畫面の都合上腰部に帛を纏ふて居るのです、でコレまで描いたのは先づ日本人のと西洋人のと相半して居るでせう、學校の摸型ですか、なか／＼西洋人を備ふといふヨーな餘裕がありませんから日本人を使つて居ますヨ、コレも一週間毎に斷つつ變つつた人に取り換かつて居ます、これまで使つた數は夥しいものですが一週間の平均女子一人男子二人強です、男子の方は得易いですが女子の方はソー行きません、摸型になる女子ですか、ドーセ良家の處女などはなる筈はありませんが両親も其事柄が分解つて見れば敢て節操を破るといふ次第でもなし、人の爲になることで比較的収入も多い點から酌婦や藝娼妓にするよりは、といふので出すのが多いヨ一です、摸型として西洋人と日本人との筋肉の美の優劣ですか、強ち日本人が不良わるいとのみはいはれませんナ、一体筋肉の美といふのは發達すべき處が完全に發達して居るの謂で、畫としては線、否、形の美を最も尊むです、場合によつて餘り十分に發達した——即ち筋肉の美ですナ——點は畫としては省くこともあるのです、何しろ彫刻物は八方から見ることが出來ますが畫は單に或る一面から見るので、ヨホド鑑みつて筆を下さねばならぬのです云々

『京都日出新聞』明治三十六年七月二十五日

本文献中の「博覧会」とは「名家談叢 洋畫談」(本書九三〜九六頁)の注釈でもふれた第五回内国勸業博覧会のこと。裸体画における時代や人種を超えた普遍性の主張は、「千萬言 黒田清輝氏の裸体畫談」(本書九〇〜九二頁)にも見出せる。腰部に帛を纏った西洋婦人の画とは、その年の白馬会第八回展に出品した《春》《秋》のことだろうか。